

②単元の内容

単元名「自分のペンケースを作ろう」
 (K児が「袋物」という投げかけの中で、自分で選んだ題材)
 「何を入れようかな」・「どんな色、どんな柄」・「材料を買いに行こう」
 「糸を通そう」・「縫ってみよう」・「スナップをつけよう」・「ボタンをつけよう」

③成果と課題

学習と家庭とのつながり	学習の中で定着したこと・拡がり	今後の課題
妹が、学習で作っているリュックサックに興味を持ち、妹にミシンの操作を習いながらお母さんに手伝ってもらおうことなく自分でリュックサックを作り上げた。	3ミリ程度の間隔の点線を目印に、かなり正確に運針ができるようになった。 糸通しが一人でできるようになった。 スナップやボタンを少しの支援でつけられるようになった。 余った布で小袋を追加して作り、好きな先生へプレゼントした。	身につけた技能を実用のみでなく、生活の豊かさにつなげていくような活動設定と支援の必要を感じた。

4. 考察

これは、学習で得た達成感や興味の拡がりが次の活動の意欲へとうまくつながっている例である。グループ内の他の生徒も、個人によって多少の違いがあってもそうした循環が見られる。しかし、手指の巧緻性や、必要とする支援の内容は個人差が大きく、今回取り上げた裁縫という技能を実生活へつなげて行くには、様々な角度からのアプローチが繰り返し行われることが必要と感じられた。



(田中祐子)

【6】成果と課題

1 やったねタイムの成果と課題

○やったねタイムの時間設定について

やったねタイムを2校時目に帯状に設定したことにより、生徒は反復・継続して学習に取り組むことができた。この点により、学習に対する見通しを持ちやすく、意欲的に取り組めた。また、繰り返すことにより技能が定着しやすい面も見られた。

自閉症児に対して、行事に左右されない見通しの持てる生活時間が保障できた。

○グルーピングについて

教師は、支援を焦点化して考えることができた。また、ゆったりとしたペースの生

徒が集まったグループでは、一人ひとりの活動を十分に待つことができた。生徒が自分の思いを積極的に伝えようとする場面も多く見られた。

クラス集団とは違う友達の様子を見て、「自分もやってみたい」「同じようにしたい」と意欲が高まり、学びあう姿が見られた。

グループの生徒の担任ではない教員が授業を担当することで、生徒を多角的な視点で見られるようになった。

○グループ分けの際の問題点

グループ分けの際、生徒の「見通しを持つ力」の幅をどう見るか教員によって違いがあり、検討に時間がかかった。

○学習内容について

「生活に直結した力」をつけることをねらいとしたが、「生活に直結した力」を定義づけたり、その内容をどのように決定したりしていくか、まだ試行錯誤の段階である。生徒一人ひとりの生活を考えながら、より適切な学習活動を設定していく必要がある。

保護者が興味をもち、家庭生活で生かしていこうと思うような視点からも、学習内容を工夫する必要を感じた。

○家庭との連携

学級担任がグループ内にいない場合もある。このような場合、学習の様子は保護者に伝わりにくく、連携の工夫が必要だった。

2 研究全体の成果と課題

○家庭との連携

やったねタイムの学習内容を考える中で、家庭との連携の大切さを感じた。学習したことを家庭でも取り入れ、また、家庭でやっていることを学校でも取り組んでみることにより、生徒の活動が広がったり深まったりしていく。少しずつ取り組みを始めているが、まだ十分ではない。

また、保護者の将来についての願いをしっかりと受け止め、それを大切にしたい実践を考えていくことにもさらに力を入れていきたいと感じた。

○学習内容の変化

「生活を楽しむ」をテーマに実践に取り組んでいるが、学習内容を大きく変えていくことは難しく、前年度の内容を引き継いで実践していた部分も少なくなかった。しかし、少しずつ学習内容も変化を見せつつある。生徒の課題の捉え方もそうだが、学習内容も以前に比べて広がってきている。

○自分づくりの考え方

「グループ分けの観点」や「支援を考える上で大切にしたいこと」の中には自分づくりの視点が含まれている。しかし、中学部では自分づくりの研修はまだ途上であり、今後更に研修を深めていく必要がある。

(中垣克彦)